

聖徒の道



1980

9月号

Glenn E. Nielsen Testimony for the Cody Ward Mission

末日聖徒イエス・キリスト教会

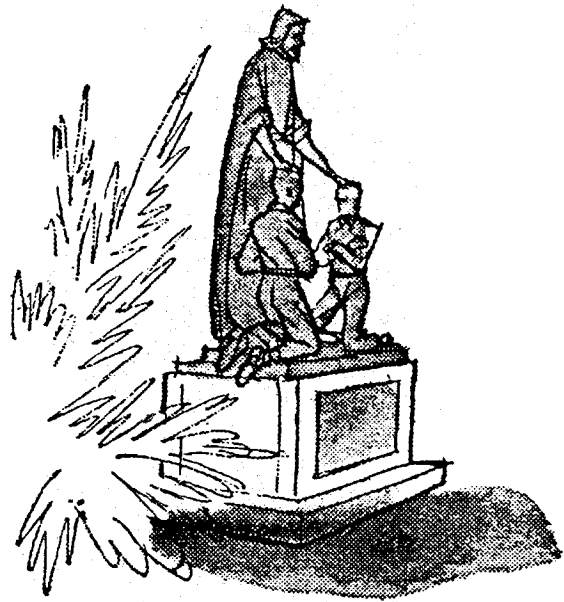
内 案 書 図

教義と聖約	上質革製合本……一〇〇円
高価なる真珠	……一〇〇円
モルモン経	……一〇〇円
教義と聖約	合本……三〇〇円
高価なる真珠	……三〇〇円
モルモン経	（新訳）……二〇〇円
信仰箇条の研究	……三三〇円
モルモンとは	……一〇〇円
完成への道	……二〇〇円
初等協会教科書	……一五〇円
総合聖句の手引	……一五〇円
日本系図探究要覧	……一〇〇円
古代アメリカの生活	……一〇〇円
旧約聖書物語	……一五〇円
家督権の祝福	……一〇〇円
扶助協会手引	……五〇円

日曜学校用	……
宗教と生活 II	……一五〇円
よきおとづれ	……一〇〇円
聖書物語語	……一五〇円
福音の実践	……一五〇円
聖典中の指導者	……一五〇円
M I A 用	……
役員と指導書の手引	……一〇〇円
モルモン経研究ガイド	……一〇〇円
真理の道	……一〇〇円
M I A 手引（付録）	……一五〇円
演劇指導者基礎知識と脚本集	……七五円
演説が上手になる法	……一五〇円
社交ダンス必携	……一六〇円
新しいフォークダンス	……五〇円
讃美歌及び歌集	……
末日聖徒讃美歌	……三〇〇円
末日聖徒讃美歌抜萃	……三〇〇円
子等は歌う	……一〇〇円
レクリエーション歌集	……四〇〇円

聖徒の道

1960年9月号



〔予言者のことば〕

われらは真実なるべきことを信ず……

デビド・O・マッケイ…(258)

〔伝道部長メッセージ〕

天の窓…… H・テッド・ブライス…(261)

「モルモンの教義」

「聖霊」「みたまの賜」「キリストのみたま」(16)

…… 佐藤 竜猪…(264)

「モルモン教」と「老子」と「高橋五郎」…… (268)

主よ我なるか…… スターリング・W・シール…(270)

聖地を巡りて(3)…… 渡部 正雄…(274)

私はこうして神の真の教会に導びかれた

…… 丸山 周兵…(278)

自由と私たち…… 南城 綺子…(279)

仙台支部活動…… (280)

母と妻と娘…… 小室 啓…(282)

末日聖徒イエス・キリスト教会歴史粹(9)

ジョセフ・フィールディング・スミス……(283)

テッド・ブライス家…… (287)

伝道本部だより…… (289)

「われらは真実なるべきことを信ず」

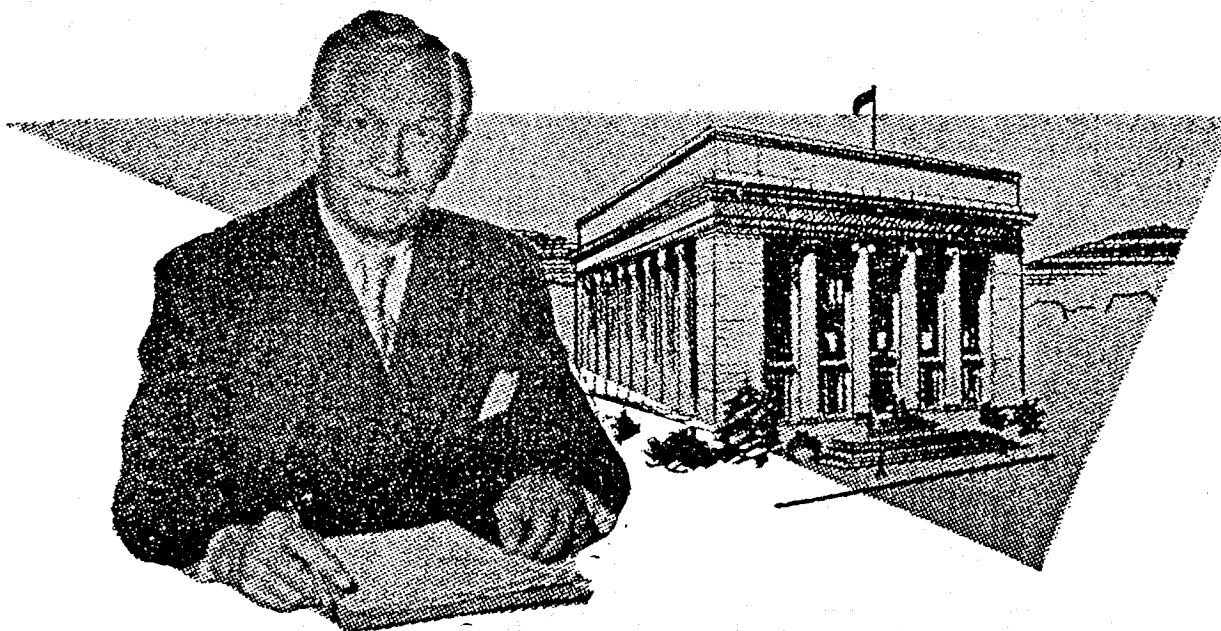
大管長 デビド・O・マッケイ

信念のない教師は教える資格なし

「信仰箇条」の第十三条は倫理上の諸原則を最もよく総括してあらわしたものの一つであって、その始めの部分には「われらは正直、真実、貞潔、慈善、高德なるべきこと、およびすべての人に善を行うべきを信ず」とある。

あらゆる教師は自己に誠実でなければならない。あらゆる教師は自己の生徒に誠実でなければならない。まず第一に、授業の準備をするに当って、どの教師も自分が信念をもっていないことを教えようとしてはならない。それは自分にとって、これから教えようとしている生徒にとって、教会にとって、また隣人にとって公明正大でないことである。

準備の第一段目は自己反省である。これから教える学課が何であるにせよ、まず第一に為すべきことは、内省をしてこれから教えようとしていることに自分が信念をもっているかどうかをしらべてみることである。私は単に或る事件の中の事実就て言っているのではない。その事件が聖書、モルモン経または人生の中の事実からとられたものであっても、それは永遠不変の真理を教える手段にすぎない。教師はその真理を自分が信じているかどうか気をつけてみな



ければならない。もしも信じていないなら教えるべきではない。もしも信じていないのに教えるならば、その教師は自己に不誠実でありまた自己が代表する教会に対して不誠実である。教師たちが福音の或る原則に就て信念を持っていないのに、その原則を話すことを楽しんでいるように見えるとき、聞いている者には理解の困難と失望とがある。君はレッスンの準備をしたか。準備が終ったなら内省をして自分に信念があるかどうかを見てみよう。そして自分が本当に信じている面と、自分が知っていることが真実である面とを選んで教えよ。

例えば、もし祈りに就て教えているならば、戦争に行つたとき、祈りは「いと高き神に対する無遠慮な仕業」であると思つていた兵士の態度をとつてはいけない。もしも君がそう思っているならば、祈りのもつ実際の祝福を教えるようにする君の企てはむだになるにちがいない。これに反し、もしも祈りに実効のあることを君が学び知っていたならば、生徒がそれを感じるように教えることができるにちがいない。あの兵士が祈りの実効を確信するようになったときに言つた証詞の力、人を納得させずにはおかぬその強い力に心を留めたまへ。

「小供の時から、私は祈りは恥知らずな所業である。神さまに話しかけるといふ無礼な仕打ちであるといふ印象をいつも受けていました。ところが或る日、敵の物凄い砲撃

を受けて天地がひっくり返つたとき、私は一時ふらふらとしました。そして「神さま、どうか私の部下のために私を落着かせて下さい」と言いつづけていました。その祈りは聞かれました。祈りが聞かれた具体的証明は今私の胸にかかつている勲章ですが、私はこれをどこかの教会へ預けておくのが当然だと思っています。しかし、私がこの勲章の綬に目をやるとき、私はいつもあの時の祈りを思い出すのです」と。

君の教えることに信念を持て。信念をもっていないレッスンの如何なる部分もくり返すなかれ。第二段目は、今教えている少年少女に対して誠実であることである。君は彼らに友達同志であると思わせなくてはならない。道ばたで彼らに逢つたら話しかけよ、家へおいでなさいと招待せよ。彼らは本当に君を信じている。君が彼らを見捨てると思うとき、彼らは実にそれを知っているやうなふりをする。彼らが君に対して冷淡であり無関心であると思えるときには、その理由をしらべよ。君は彼らがいろいろな問題をもっていることを知っている。われわれの中にはほかの人々が余りにうちとけない、また余りに高く止まっているという考えをもっている人々があるかも知れない。しかし、われわれがもっとよく知り合になつてみると、彼らは初対面の印象とはちがつて居り、うちとけないのはこちらの方であつたことがわかる。

子供たちは往々誤って判断される。或るワード部にあったことであるが、クリスマスの休みになるちようど前に一人の男の子が非常な妨害を起していた。この男の子はたえず手をのばしては、先生の手袋にさわろうとして止めなかった。先生は止めなさいと度々言ったが、その子は言うことを聞かずにと手を出しては先生の手袋にさわった。それで先生は、自分の言ったことが全然その子の耳にも何にも入っていなかったと思った。その子は手袋をもてあそぶことをどうしても止めなかった。ところで、次の日曜にならないうちにクリスマスが来た。あとで、そのクラスの子どもが先生に一对の手袋をクリスマスのプレゼントとして贈ったときに、その先生は驚いた。あの手に負えない子供こそ先生にその贈り物を呈上した当人であった。その子は言った「この前の日曜日に先生の手袋をひっぱっていたのは、手袋のサイズを測りたかったからなんです」と。

第三番目の要点はよく準備をすることである。君の身のまわりにあるいろいろな物を利用せよ。自分の弟子たちと一しょに腰をおろして、農夫たちが春蒔きの種子を蒔いているのを見下ろしておいでになった、あの偉大な教師イエス・キリストのお示しになった模範を示せ。イエスは仰せになった「良き地に落ちし種子あり。石地に落ちし種子あり」と。そこに人生の教訓があった。渴きをいやそうとして井戸の処へ来たサマリヤの女はもう一つの例である。イ

エスはこの女に、わが与うる水は汝の中にて泉となり、永遠の生命の水湧き出ずべし、と仰せになった。多くの経験を集めて、それから一つ一つの要点を説明せよ。私は、準備すべきレッスンを持っている君たちあらゆる教師にとってそれが一つの教訓であると思う、すなわち話し方の準備をするのではなくて、自分が伝えるべき言葉を準備するのである。

われわれは皆新しい方法を必要とする。授業を行うには多くのやり方があるが、正しくない方法もたくさんある。もしも、君が準備と研究さえするならば新しい方法は自ずからあらわれてくる。われわれは、自分と自分の生徒たちに誠実であるようしっかりと立とうではないか。それが一番大切なことである。





天の窓

H・テッド・プライス

(第一副伝道部長)

オークの木が生い繁^{しげ}っている中部カリフォルニアの丘の間に旅行者の地図にもものっていないような小さな田舎町があります。メルシード川のほとりにあるこのひっそりとした谷間へ行くほこりだらけの凸凹^{でこぼこ}道には、今ではそんなに多くの車も目に入りません。しかし今から二十五年前、こ

こは忙しい興奮の渦まく所でした。私が小さい時に水泳ぎをおぼえた所こそメルシードフォールズの小さな町でした。河縁^{かわぎ}に山ぶどうの実が大きくなるのも、また人のよぢのぼったことがあるとも思えない、目のまわるほど高い岩棚の上で日の光と夏の風とを全身に感じたのもその町のことでした。

私の両親が私と三人の弟の先に立って祈りを捧げ、天の父なる神さまにその日の祝福を感謝するときに、私は両親と一しょにひざまづいてお祈りをしたことをごく小さい時

から想い起すことができます。私たちが眠りにつく前に捧げる人知れぬ自分自分の小さな祈りの中で、私と弟たちはその日その日の幼い、いろいろな問題をもう一度数え直したのです。どうも私たちも、親切な父なる神さまが愛とめぐみの御ところによって私たちの重荷になさらないいろいろな此世の物を度々願い求めたことがあると思いますね。この頃、私たちにとってとくに大切であったのは、夕ごはんのすんだ後、あのなつかしい薪^きの燃えている台所のストーヴのまわりで、私の母が聖書を毎日読んでくれるのを聞くことでした。

私たちの霊^いの糧^かであったこの時間の中に、私たちはあの予言者モーセと一しょに海の底を安全に歩いてわたり、あの勇敢なダビデが石投げで一撃にゴリアテを倒したときに万歳を叫び、イエスが唯一人十字架の上にのこされた時に

声をあげて泣きました。私たちが「天の窓」について学んだのもこのすばらしい時間の中のことでした。旧約聖書の一番おしまいの書、マラキ書の第三章十節に予言者マラキの言葉がのっています。その中にあるマラキの偉大な約束を私たちはくり返しくり返し読みました。

「わたしの宮に食物のあるように、十分の一全部をわたしの倉に携えてきなさい。これをもってわたしを試み、わたしが天の窓を開いて、あふるる恵みをあなたに注ぐか否かを見なさいと、万軍の主は言われる」(マラキ書三〇十)

私たちは、主が昔の予言者を通してお言いになったこれらの言葉は真実であるということを知っていましたから、その言葉に従うように努めました。

いつも日曜日になると、私たちは古いフォードに一ぱい乗りこんで、聖餐をまたいたくためにメルシードまで十六マイルの凸凹道を走らせました。そして毎月二回小さな白い封筒に「什分の一」を入れて監督のところへ納めました。父が少い給料をもらうために長時間一生けん命働いているので、私たち小供たちには「什分の一」やそのほか教会のする計画のためにお金を寄附しているのが不思議に思えることがありました。しかし、私たちは祝福が天から下ってくるのを少しも疑わずに待っていました。私たちはかくべつ暮しがよかったわけではありませんでしたが、それでもみな幸福で健康でしたから、夕食の卓をかこんで感謝

の祈りを捧げるときに、私たちは天の窓がほんとに開いているのを感じました。

ところで、私が九才のとき父が鉱山の事故で亡くなりました。それから間もなく、私たちは悲しい心を抱いて、このメルシードフォールズの小さな町のお友だちと別れを告げました。私が一人の小さい金髪の小学校友だちに別れを告げたとき、私はとくに祈りを捧げて、私はいつの日か世の中へ出て名声と富とを得た後にこの町へ帰ってくることができると言いました。私は小供ながら頭の中に、私が将来新しい服を着て新しい車に乗り、ここへ帰ってきて皆の人に遠い遠い所で不思議な冒険をしたことを語る姿を生きてと画いていました。それから私たちの乗った小さな車は凸凹道をガクゴトと走って新しい世界へ出て行きました。

一九四二年——アメリカ海兵隊に加わって太平洋戦争に参加。戦友の死に会して祈りの真義を一層知る。今なお時にメルシードフォールズの町のことを考え、金髪の少女はどうしているかと思う。

一九四四年——テニヤン島の会戦に於て重傷を負ったが再びわが祈りは聞かれた。奇蹟的に短時に健康を回復。

一九四五年——平和回復して母の許に帰る。母は今や白髪が目立つようになったが、相変らず毎日聖書を読み、わが子らのために祈る。

一九四八年——弟レイと共に日本へ宣教師となつて行く。不思議な言葉を習つて他の人々に回復された福音の偉大

な言葉を伝える。日本人の兄弟姉妹、天の窓について学ぶ。

一九五一年——宣教師の任務完了。美しいモルモン娘とハ、ワイ神殿にて結婚式を挙げ、すばらしい新生活へ一步を踏み出す。

昨年のことでした。私は中部カリフォルニアのスーパーハイウェイ、六つの車道がついている大きなハイウェイに独りで車を走らせていました。その時、私はアメリカ移民局に勤めていましたが、同僚の一人と特に集るために新しい車に乗って出かけたのでした。幸い数時間の余裕があったので、私はあたりの景色をながめながらもよりゆっくり車を走らせていました。すると、雨風に打ちひしがれた一つの古い標識が突然目についたので私はぐっとブレーキを踏みました。古い凸凹道を指しているその標識の上には「メルシードフォールズここより十六マイル」と記してありました。私がハンドルをきってこの道へ車を乗り入れ、過去へ向って道を進み始めるや、一つ一つのカーヴを廻る度に昔の思い出と感慨とが洪水のように私の胸へ押し寄せてきました。あれから二十五年たって、今私はとうとうあのなつかしい故郷ふるさとの町へ帰りつつあるのだ。私の古い友だちは私の顔を見てびっくりするだろうか、それとも忘れないでいてくれただろうか。それから、あの金髪の少女はどうしたか知ら。私は谷の入口にある丘の上を走る最後のカーヴを廻って車を止め、故郷の町を眺め見わたしたところ、自分で自分の目を疑いました。

そこには目に入るかぎり一軒の家ものこっていませんでした。人っ子ひとり見えませんでした。鉾山が事業を閉鎖するや、そこに働いていた人々とその家族とは、ほかの所に職を求めてまず姿を消し、それからその人々の家、あのなつかしい店、あの学校などは材木にするため皆とりこわされてしまっていました。ただあのなつかしい河と暖い日の光と曲りくねった古いオークの木たちが昔の姿そのままに私を迎えてくれたので、ほんとうに故郷ふるさとの町へ帰ってきただなと私は思ったことでした。そよ吹く風の音さえしないその美しい沈黙しじまの中で、私はこれまでいつも私が受けてきている人生の中の多くの祝福、善い家族、自由、神の教えを知っていることなどを考えていました。私はまたもっと近ごろつけ加えられた数々の祝福、すなわち私のすばらしい妻と三人の子供のことを考えていました。私が実感したこれらのことはすべての祝福の中の最も大きな祝福でありましたが、もつと此世に関することを求めるとき往々見過ごされていたのでありました。私はこれらの古い木々の近くから、私の父が昔々私にくれたように、その親切な賢い言葉を話しかけているのが本当に聞えたように思いました。

私は、私の父と私とはいつの日かまた話し合うにちがいないことをはつきりと知って居ります。また私は昔の予言者マラキの言ったように、本当に主は天の窓を開いてあふれるほどの恵みを注ぎたもうことをはつきりと知って居ります。

「聖霊」「みたまの賜」

「キリストのみたま」(十六)

佐藤 龍 猪

われらは、永遠の父なる神と、その御子イエス・キリストと

聖霊とを信ず。

信仰箇条 第一条

一、聖霊 (The Holy Ghost)

聖霊は父なる神とその御子イエス・キリストと共に神会 (Godhead) の中に連りたもう御方であつて、霊体にまします神である。父なる神とその御子イエス・キリストは共に人間の有する肉体と同じく触知し得る骨肉の体 (復活体) を有したもうが、聖霊はこのような体を有したまわず、ただ霊の体を有したもう御方である (「教義と聖約」第百三十三章二十二節、「信仰箇条の研究」二一五頁参照)。

ら一定の大きさがあり、広大な宇宙に満ち充ちるとか、その本体が同時にあらゆる場所に存在するとか言うことはない (「救いの教義」第一卷三十八頁)。

聖霊 (Holy Ghost) はまた「みたま」

(Spirit) (ニーファイ第一書四〇六、一〇一十一、十二、モーサヤ書十三〇五、マルコ伝一〇十、ヨハネ伝一〇三十二)、主の「みたま」(The Spirit of the Lord) 「ニーファイ第一書十一〇一、十一〇十二、ニーファイ第二書二十六〇十一)、神の「みたま」(The Spirit of God) (マタイ伝三〇十六、十二〇二十八、ニーファイ第一書十三〇十二)、真理の「みたま」(The Spirit of Truth) (ヨハネ伝十五〇二十六、十六〇十三) および「慰め主」または「助け主」(The Comforter) (ヨハネ伝十四〇十六) とも呼ばれ、ある場合は神なる聖霊という御方を指して言い、また他の場合には神より出るところの能力を指して言う (「信仰箇条の研究」二一六頁、「救いの教義」第一卷五十頁参照)。

聖霊は教え導き (ヨハネ伝十四〇二十六、十六〇十三)、父と御子とを証し (ヨハネ伝十五〇二十六)、罪を責め (ヨハネ伝十六〇八)、委任し (使徒行法十〇十九、十三〇二)、黙示録二〇七)、罪人のためにとりなし (ロマ書八〇二十六)、憂い (エペソ書四〇三十)、探り求め (コリント前書二〇四一十)、善導し (モーサヤ書三〇十九)、よろずの事を知りたもう (アルマ書七〇十三)。すなわち聖霊は父なる神から遣わされる教師であつて (ヨハネ伝十四〇二十六)、聖霊の教えを受けるにふさわしい者に身も霊も進歩するために必要なすべての事を明したもう。(「信仰箇条の研究」二一六―二一九頁参照)。

二、「みたま」の賜

「みたま」の賜、或いは「聖霊」の賜とは、

聖霊はこのように霊体 (人の形と同じ―ニーファイ第一書十一〇十一及び「信仰箇条の研究」二一六頁参照) を有したもうか

人が聖霊と共に居り、その導きと恵みをいただく権利にはかならない（「救いの教義」第一巻四十頁参照）。人は祈りによって「みたま」の賜を受けることはできない。「自分の一」を完全に納めても「みたま」の賜を受けることはできない。また「智慧の言葉」を欠けなく守っても「みたま」の賜を受けることはできない。また罪を赦されるため水に沈められるバプテスマを受けても「みたま」の賜を受けることはできない。

人は水に沈められるバプテスマを受けてから、大神権の権能を保有する人の按手を受けて始めて「みたま」の賜を受けることができる。実際にはバプテスマの後に「確認の式」を行い、大神権の権能を保有する者が、バプテスマを受けた者の頭に両手を置き、その者の姓名を呼んで「聖霊を受けよ」と言つて「聖霊」の賜を受ける資格を与えらる。従つて「みたま」の賜もしくは「聖霊」の賜を受けることのできる者は、バプテスマを受けて当教会の会員であることを「確認」された者に限る（「救いの教義」第一巻四十頁参照）。

信仰の強い異邦人コルネリオは聖霊を受けて神の使を目のあたりに見、またその委

任を受けて三人の者をベテロのところに遣わし、神の使がコルネリオに告げたことを言い送った（使徒行伝第十章参照）。これはコルネリオがまだバプテスマを受けない前に起つた。このように聖霊は、コルネリオの如く熱心に真理を求める者に顕示を賜うことがよくある。

モロナイは「またこの記録を受ける時、それが真実なものであるかどうかをキリストの御名によって永遠の父なる神に問え。もし誠心誠意でその上キリストを信じながら問うならば、神は聖霊の力によってこの記録が確なものであることをあなたたちに示したもうにちがいない。そして聖霊の力によって一切の事の真実であるかどうかあなたたちに解る」と宣言している（モルモン経、モロナイ書十〇四）。

真理と光明とを熱心に求める人は、たとえその人が教会に入っていないなくとも、聖霊の顕示を受けることができる。すなわち真理を求めている人は、それが誰であっても聖霊の顕示を与えられることがあるが、助けを必要とする時事聖霊が伴にならないうて導きと恵みを与えたもう権利は、心から悔い改めてバプテスマを受け大神権を保

有する者の按手によって「確認」された教会員にだけ永久的な個人の所有として与えられる（「信仰箇条の研究」二二二—二二三頁、「救いの教義」第一巻四十二頁参照）。かくの如く「聖霊」と「聖霊」の賜とは明らかに区別せられる。

権能を有する者の按手を受けて「聖霊」の賜を授けられた教会員は、自分個人に必要であり且つ役に立ついろいろの啓示を受ける権利がある。但しこの啓示は個人の導きに役立つ啓示であつて、教会に与えられる啓示ではないことを知るべきである（「救いの教義」第一巻四十四頁参照）。

然しながら一たびこのような祝福を授けられた者も、謙遜の徳を失つてごうまんとする時は、「みたま」が引き退きたもう故に正しい道を見誤るようになり、「みたま」の賜はもはや彼の内にない。

聖霊の特別な職務は人の心を照らして高貴ならしめ、身も霊も清めて神聖にし、善行をばげまし、神の事を啓示するにあるが、これらの祝福のほかに「聖霊」の賜に関連して約束された或る特別の賜がある。すなわち救い主は「信ずる者にはこれらのしるしともなわん。すなわちわが名によりて彼らは多くの驚

嘆すべき業をなし、わが名によりて悪霊を追出し、わが名によりて病める者を医し、わが名によりて盲者の目を開き、みみしいの耳を明け、おしの舌言葉を出し、毒を盛らるるとも害を受けず、蛇の毒も彼らに害する力なからん」と仰せになった（「教義と聖約」八十四〇六十五—七十二、マルコ伝十六〇十七・十八、コリント前書十二〇一一十一参照）。

三、「約束の聖きみたま」

「これらの者は信仰によりて打ち勝ち、御父が正しく且つ真実なる者に皆注ぎたまう『約束の聖きみたま』によりて結び固めらる」（「教義と聖約」七十六〇五十三）

「また『約束の聖きみたま』によりて今も永世にも亘りて結び固められずば……死にし者より復活する時もその後にも何らの効験効能または効力あることなし」（「教義と聖約」百三十二〇七）。

「約束の聖きみたま」とは、あらゆる福音の儀式すなわちバプテスマ、確認、按手聖任、結婚などの儀式に承認の証印を捺したもう「聖霊」である。その約束とは、すなわち受ける者の忠実なることによつて諸

々の祝福が授けられるという約束である。もしも人がバプテスマ、按手聖任、結婚その他の儀式を受けた際に誓った契約を破るようなことがあれば「みたま」は承認の証印を取り去りたもうから諸々の祝福を受けることができない。

あらゆる福音の儀式は、忠実なることによつて良い酬いを与えるという約束が結び固めてある。それであるから、誓約が破れるときには「約束の聖きみたま」は承認の証印を取り去りたまい、もはや祝福を受ける力はなくなつてしまふのである（「救いの教義」第一卷四十五頁参照）。

四、すべての予言者と「聖霊」

「されどわれまことを汝らに告ぐ、わが去るは汝らの益なり。われ去らずば助主汝らに來らじ。われ行かばこれを汝らに遣わさん」（ヨハネ伝十六〇七）。

キリストが此世に在つて導きと恵みを施して居たもうた時、「聖霊」がたえずキリストの弟子たちと伴に居りたもうたわけではない。キリストは明らかに弟子たちに向つて、今汝らは助主すなわち「聖霊」と伴になつて居ないが、われが去るとき汝らを導

いて真理を悟らしめるため「彼すなわち真理の御霊」を送らんと仰せになった（ヨハネ伝十六〇十三参照）。

キリストは神会（Godhead）の中に連りたもう神であるから、キリストが弟子たちと共に居りたもう時弟子たちは「聖霊」と伴になることはなかった（使徒行伝十〇三十四—三十八、「救いの教義」第一卷四十六頁参照）。

「聖霊」はかくの如く、キリストが十字架にかかつて死に、復活して天に昇りたもうてから、御父のもとより遣わされたもうたので（ヨハネ伝十五〇二十六）、それ以前に在った昔の予言者たちは「聖霊」を宿さなかったと言う人もある。旧約聖書には「聖霊」とこそ誌してないが、「神の霊」としてしばしば記録されている（創世記四十一〇三十八、出エジプト記三十一〇三、三十五〇三十一、民数紀略二十四〇二、サムエル前書十〇十、十一〇六、十九〇二十・二十三、歴代志略下十五〇一、エゼキエル十一〇二十四）。

事実すべての予言者は「聖霊」を宿していた。予言者は「聖霊」の導きを受け、「聖霊」の命を受けて行動した。全く「聖霊」によらなければ、彼らは予言者であることはできなかった。ペテロも次のように言っている。す

なわち「予言は人の心より出でしにあら
ず、人々聖霊に動かされ神によりて語れる
なり」と（ペテロ後書一〇二十一）、（高価
なる真珠、モーセの書一〇二十四、五〇五
十八、六〇五十二、八〇二十四、ニーフ
アイ第一書十〇七十七十九、ニーフアイ第二
書三十一〇十三―二十一、「救いの教義」
第一卷四十六・四十七頁参照）。

五、「イエス・キリストのみたま」

(The Spirit of Jesus Christ)

前に述べたように「聖霊」は父なる神と御
子イエス・キリストと共に神会(Godhead)
の中に連りたもう御方であつて霊体にま
します神である。そして「みたま」「主のみ
たま」「神のみたま」「真理のみたま」
「聖きみたま」「助け主」もしくは「慰め
主」等の別名がある。

ここに「イエス・キリストのみたま」も
また「真理の光」「キリストの光」「主の
みたま」「神のみたま」等の別名があつて
きわめてまぎらわしいが、前者とは全く異
る。「聖霊」は霊体を有したもう神である
が、「キリストのみたま」は「父なる神と
御子イエス・キリスト」の御もとから出る

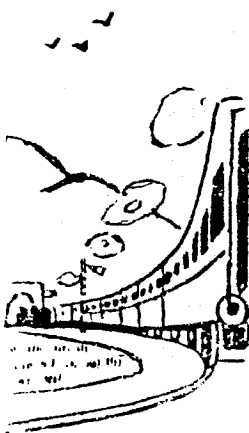
神の能力であつて（「救いの教義」第一卷
四十九・五十頁参照）、広大なる宇宙に満
ち充ち、すべての物の中に在る光であつて
すべてのものに生命を与え、而もすべての
ものを支配する律法であつて、すべてのも
のの中にあり、永遠の内にあり、自らの王
座の上に在る神の力である（「教義と聖約」
第八十八章十二―十三節参照）。

かくの如く「キリストのみたま」もしくは
は「真理の光」或いは「主のみたま」は、
万人が生れながらにして、これを受ける権
利をもっている「みたま」であつて、或る
時は「良心」として人の心に正しい道を告
げ、また万物を育成し星宿を繋ぎ天体の運
行を司りすべてを支配し、すべての物の中
にある光である。

神は「この世に生れて来た者すべて」に
「真理の光」もしくは「イエス・キリスト
のみたま」による導きを与えたもう。従つ
て或る人がこの「みたま」のささやきに耳
を傾けるならば真理に導かれる（モロナイ
書十〇四参照）。

ヨエル書第二章二十八―二十九節に言つ
てあるところの「一切の人」が靈感を受け
るといふ主の約束は、「聖霊」を与える

いう約束ではなくて、「キリストの光」すな
わち「真理のみたま」の導きを与えるという
約束であつた。これまで教会員でない人々に
与えられた靈感はこの「真理のみたま」によ
る。これまでに行われた数々の大発見、大発
明はみなこの「真理のみたま」の媒ちによる
ものである。創世記第六章三節に言うところ
の「わが霊」もこの「真理のみたま」、コロ
ンブスを導いてアメリカ大陸を発見させたの
もこの「真理のみたま」である。「聖霊」の
本体は万物を貫いて働くこの「キリストのみ
たま」を通して働きを現わしたもうか、もし
くは自ら親しく接して働きたもうのである。
（「救いの教義」第一卷四十九―五十四頁参
照）。



「モルモン教」と

「老子」と

「高橋五郎」

高橋五郎氏（安政三年―昭和十年）の著書に「モルモン教とモルモン教徒、附米利加土人起原論」という本がある。この本に就ては「聖徒の道」六月号（一九六〇）にその紹介が載ったことがあるが、開巻第一頁の裏面に

『上士聞道、勤而行之、中士聞道、若存若亡、下士聞道、大笑之、不笑不足以爲道、故建言有之、明道如昧、夷道若類、進道若退、上德若谷、大白若辱、建德若偷、質真若渝、大方無隅、大音希聲、大象無形』

という漢文が載っている。

この原文は「老子」の第四十一章にあって「大白若辱」の次に「広徳若不足」、「大方無隅」の次に「大器晚成」、「大象無形」の次に「道隠無名、夫唯道善貸且善成」という句が入っている。また原文では「進道若退、夷道若類」となっているが、何れにしても高橋五郎氏の引用文のものは老子第四十一章であることが明瞭である。

もともと「老子」の文は韻が踏んであつて歌うことができ、これによって記憶し易いようになっている。この一文も有韻であるから古いものと考えられる。さてこれを読んでみると次のようである。すなわち

「上士は道を聞けばつとめてこれを行う。

中士は道を聞けば存するが如く無きが如し。下士は道を聞けば大いに笑う。笑わざれば以て道と爲すに足らず。故に建言これあり。明道はくらきが如く、進道は退くが如く、夷道は類の如し。上徳は谷の如く、大白は辱の如く、広徳は足らざるが如く、建徳はぬすむが如く、質真は変るが如し。大方は隅なし、大音は声なく、大象は形なし」。

次にその説明を掲げると

「上士、すなわち優れた人は深遠な道をよく理解することができるから、道を聞いたらすぐに努力してその道を履み行ふ。中くらいの人は道を聞いても半信半疑であるから、否定もしないが実行もしない。下等人になると、道を聞いても全然わからないから、大笑いをして取り合わない。しかし、下等人から笑われるところが真の道である証拠である。それであるから昔の人は次のように言つて道を説明している。宇宙の大道はけばばしい光がないからかく見え、道に進む者は利得を旨としないから退くように見え、また真の大道は平易であるが平易でないように見える。

この大道を会得している上徳の人は、得を貪る心がないからその心は虚しく、極めて潔白な人は、誰彼となく交わるからかえつて汚

れているようである。広く徳を及ぼす人は、宣伝をしないから徳が足らぬように見え、本當の徳を行う人は、人に知られずに行うから怠けているように見える。真に大道を会得した人は、どこに身を置いても変えることはないが、俗塵の中に優遊していると変えるところを見ると変ったように見える。絶大なる四角には隅がなく、絶大なる音声はその声が聞えず、絶大なる形は目に見えない」ということになる。

高橋五郎氏の著書は明治三十五年に発行されているが、当時世人がほとんど「モルモン教」について正しい知識をもっていなかった時に、すでに原文に就いて「モルモン経」の教義と聖約「高価なる真珠」等を読破し、今から見てもまことに正確な知識をもっていたことは驚嘆に値するものがある。

氏がその序文に於て「小はもとより以て大を容るる能わず、ミルトン曰く群雀はけんけんごうごうとして靈鷲の天をつくを怪しみ且つあざけると、真に然り、真に然り、書して以て自ら戒しむ」と言っている真意は、前に説明した「老子」からの引用文の中によく説き尽されていると思う。

高橋氏は更に「モルモン経」に言い及んで「モルモン経はその性質キリスト教のバイブルに等しくして、すなわち歴史と予言と鑑戒とを兼ね合せたるものとす、而してその中に

於ける最も大胆なる部分はそれが歴史に關する所にありと言わざるべからず、如何となればその歴史はこれ直ちにアメリカの太古史および古代史なるが故なり」と述べ、「モルモン経」の内容を極めて簡潔明瞭に紹介している。すなわち

太古に於て人類の言語が乱れて話が互いに通じなくなつた時ジャレド(ジェレド)の兄弟が神命によつて二三十名の男女を率い(アジャ、バビロニヤの地)を去つた。そして三百四十四日海に漂つた後、ついに北米に着き、子孫が盛んに増し殖えて一つの大きな國民となつたが後に分れて二つの國家となり各々二百万の兵を持つて戦い、千五百年間殖民の後に非常に高等な文明を築いたが、ついにこれらの二國民はただ一人を残してことごとく滅亡してしまつた(モルモン経の中のイテル経参照)

この頃リーハイとイシマエル(イシメル)の兩家がユダヤの首府エルサレムを去つて南アメリカの西岸に着きたちまち殖えて南北に広がつたが、ついにニーファイ人とラマン人(レーマン人)の二國民に分れて一千年間相争い相戦ふこととなつた。リーハイとイシマエル(イシメル)の兩家がパレスチナ地方を去つたのは紀元前六百年のことであつた。リーハイとイシマエル(イシメル)が渡海の後九年にしてユダヤ王ゼデキヤの一子もまた衆

を率いてザラヘムラ(ゼラヘムラ)の地へ渡つて來た。ザラヘムラ(ゼラヘムラ)とは中央アメリカ辺の地の名であつたが、この組もまた四百年の後にニーファイ人と合して北アメリカの大半を占めたが、これと同時にラマン人(レーマン人)は南米のいたるところに殖え増すに至つた。

しかし、このラマン人(レーマン人)は分離して一つの國民を成した後、その精神が墮落した結果間もなく天罰として「その皮膚を黒くせられ、次第にその知識を失ひ、やや瘴猛な者と化し、ついに今日のアメリカ土人(いわゆる銅色人)となつてしまつた」。これに反してニーファイ人は神のめぐみを受ける善良な民であつたから、数多くの名君賢臣予言者等が出た。キリストがこの世に降臨したもうことが予言者によつて告げられていたから、キリスト教的の教會が組織され、キリスト教的の道德が宣べ伝えられ、キリスト教的の儀式が執り行われてキリストの降臨を待つものようであつた。

しかし紀元三百八十四年に及んでニーファイ人はラマン人(レーマン人)の大挙して襲來するに會つて苦戦の後ただ一人を残して全滅し終つた。この一人の残存者こそ後に復活し來つてジョセフ・スミスにモルモン経の原稿を授けたモロナイという人である



十二使徒会補助

スターリング・W・シール

イエスのこの世に於ける最後の最も重要な責任は、間もなくその肩に任務を負うであろう十二弟子を準備することであった。彼らが楼上で最後の晩餐を食している時、主が次のように言われたが、その時弟子たちは如何に驚いたことであらうか。

「まことに汝らに告ぐ、汝らの中の一人われを売らん」マタイ伝二六・二一

マタイは言っている

「弟子たち甚く憂いて、おのおの『主よ、我なるか』と言いいでし」マタイ伝二六・二二

裏切りはひどいことである。そしてこの欠点またはその他の弱点に対処する最上の道はそれらを行う前に心の中から、そのような氣持を根こそぎにとつてしまうことである。主はこの言葉を、十二弟子全部の前に投げかけることによって、彼らと共に居る間に少し彼らに反省させようとしたに相違ない。その問題の中心は勿論ユダにあったが、主は同時に十一人にも教課を与えたのであった。何となればユダが部屋から出て行き、他の者たちが晩餐をすませて讚美歌を歌いながらオリヴ山に向う時主は十一人に言われた。

「今宵なんぢら皆われに就きて躓かん」マタイ伝二六・三一

後に善に対しかくも強力となり、また主の爲にその生命をも惜しまなかったペテロ自身でさえその時、自己反省の必要であったことを証明したのであった。彼はイエスに言った。

「假令みな汝に就きて躓くとも我はいつまでも躓かじ」

そこでイエスは直接彼に言った。

「……こよひ鶏鳴く前に、なんじ三たび我を否むべし」

ペテロはそのようなことが可能だと信ずることが出来ないで言った。

「我なんちと共に死ぬべき事ありとも汝を否まず」マタイは特に次のようにつけ加えている。「弟子たち皆かく言えり」マタイ伝、二六・三三―三五

ゲッセマネに來た時にイエスは彼らに言った。

「わが彼処にゆきて祈る間、なんぢら此処に坐せよ」

彼はペテロとヤコブとヨハネを伴って行き特に彼らに彼を見守って居るように頼んだ。そこで彼は彼らの側をも離れて少し進んで行って平伏して祈った。マタイ伝二六・三六―三九

彼が戻つて來た時、彼の最も信頼していた

主よ我なるか？

弟子たちが眠っていたのを見た時、彼の悲しみの重荷は更に増加したに相違ない。これは彼らがその忠誠不変を誓ってからほんのわずかの間であつた。然るに彼らは一時間彼と共に目を覚し居れと言う主の簡単な要求をも実行することが出来なかつたのであつた。そこで彼は我々自身屢々その心に思いあたる声明をしたのであつた。

、実に心は熱すれども肉体よわきなり、マタイ伝二六・四一

我々は屢々この人間性に表れる弱点を克服するように心がけるべきである。一時は我々は如何なる環境をも乗切る確信を持つが次の瞬間、我々自身のかねての期待にもはずれて失敗してしまうのである。晩餐の時にそれ程、確信に満ちていた筈の一番弟子、強固な岩、ペテロでさえ、あれ程、頑強に決してしないと否定していたそのことを鶏の鳴く前にしてしまったのである。彼は全然そのつもりはなかつたのであるが主を否んでしまったのである。我々は当夜起つたすべてのことを知らない。けれどもイエスは十一人が皆躓くであろうと予告したのである。それに就て彼は、われ牧羊者を打たん、さらば群の羊を散るべし、の予言を引用したのである。

イエスの最も忠実な弟子たちの興味あるこれらの反応は、我々自身の或危険性を指摘している。何となれば我々もまたこれら罪のすべての種を身辺に携えているからである。我々は屢々この弟子たちの批判的な質問、主よ我なるか？を我々自身の心に尋ねることによつて、その肉体を強くすることが出来るのである。我々が過ちを犯す可能性を心にとめておくことによつてのみ、我々はその過ちを犯さずにすむことが出来るのである。

トーマス・カーライルはかつて、欠点がないと自覚していることは最大なる欠点である、と指摘したが、これも我々が容易に道からそれることを示しているのである。

ユダは彼を滅ぼす程、多くの悪を彼の心の中に入れてしまったのである。我々も同様の傾向を持っていることを自覚すべきである。我々は誰も罪の可能性から解放されていないのである。選ばれた十一人でさえ重大な問題を持ったのである。主が彼らの罪の重荷の爲にしたたる血の汗を流している時でさえ、彼らは誰一人として目を覚まして主を交えていることが出来なかつたのである。

この過ちを犯す可能性は、最上の人々でも常に注意していないと増大するのである。

以前の大きいなるタルソのサウロがテモテに書いた告白を聞いて見よう。

われさきには瀆^{けが}す者、迫害する者、暴行の者なりしに。……われ信ぜぬ時に知らずして行いし故に、憐憫^{あはれみ}を蒙^{こうむ}れり。テモテ前一・

一三

けれども彼の奇跡的な改宗後、よい生涯を送ったパウロといえども決して彼がその既になしたことを取消すことは出来なかったのである。彼の悔改めが如何に真剣なものであったとしてもステパノを生き返らすこと或はその他の傷害を拭い去ることは出来なかったのである。

自分の過去を振返って、瀆^{けが}す者、迫害する者、暴行の者であったと言わねばならない程人にとって心痛なことがあるだろうか。

我々自身の成功および失敗の相違は、自らの心を反省して、その惡の思いが増大しない内に悔改めることである。もし我々がもう少し前以て自己反省する習慣を身につけていたら確かに大小多くの我々の罪を避けることが出来たであろう。そこで我々は惡の実を結ぶであろう如何なる有害な性向をも掘出して打滅することが出来るのである。我々は定期的にこの弟子たちの質問を我々自身に向ける好

機を持ち、そして率直な公平な答を主張すべきである。すべての人は定期的に彼自身の誠実さを立証し、善をなすことを身を以て約束出来ることを示すべきである。

或時に我々は弟子たちと同様に一つのことを思いながら同時に他のことをしようとしている。ペテロは自分のなしたことに就て少しもそのつもりはなかったのである。けれども彼の熱烈な宣言も一夜と保つことが出来なかったのである。故に我々は屢々与えられた環境によって我々自身如何なる行動をとるか予告することが出来ないのである。

我々は先づ惡を行ってから自問する。私は何故そんなことしたのだろうか？と、けれども屢々満足するような答をも待たないのである。ペテロは主を否んで後、心痛の余り、外に出て甚く泣いたのである。ユダも又、烈しく後悔したが彼は直ぐ充分に自分自身を検討しなかった。彼がその犯した惡を取消そうとして提供しようとしたものを祭司長らが拒絶すると彼はその裏切った銀を投げすてて出て行って自ら溢ったのである。彼がすぐこの自責の念を感じることが出来なかったことは何と残念なことであろうか。後悔も涙も、そのように遅くなつては少しの価値しかない

のである。然るに如何に屢々我々は罪を犯してから最も建設的な考えをするのであろうか。言わば我々は馬が跳び出してしまつてから納屋の鍵をしめるのである。我々がもし後悔する時を調節して、もう少し早く自責の念を感じることが出来たら我々はほとんどどの過ちを克服することが出来るであらう。

我々はユダを「滅亡の子」と言う恐るべき名で覚えてゐる。けれども彼の悲劇的な経験は我々自身の多くの過ちが同様に自己反省をよくしないことから起つてゐることを気づかせるのである。若しも我々が我々に近づいて来る惡を見出すことが出来ないなら我々は、何らの備えもなく自分を無防備の状態に放置するものである。もしも我々が後悔に費す半分の勢力を予防に費すならば我々の生活の全面は善い方に変るであらう。予防は烈しい自責の念よりも成功を納める有益な手段である。

誰かが我々は皆ユダのように主を裏切る可能性を持っていると言つたら我々は憤慨するであらう。我々は如何なる環境に在つても、正しく自分を処置して行けると確信しているようである。けれども我々は、この確信ある態度そのものを以て屢々我々を滅す罪を養成

している。

我々は裏切りに於てユダ一人だけが有罪であつたのでないことを記憶すべきである。例えば次のような状態を貴方は如何に評価しますか。昨年一つのワード部に於て、アロン神権者の八七%が個人賞をもらった。同じステーク部の他のワード部に於ては単に一〇%が有資格者であつた。最初のワード部の標準に従えば失われなかつたであろう七七%に就て誰かが責任があるのである。もしもここに裏切があるとしたら、それは何処でだましているのであろうか？

昇天する前にイエスがほとんど最後にベテロに与えた命令は三度言い付けられたものであつた。わが羊を牧へ。ヨハネ二一・一六、何もしないことによって、この命令に完全に不従順となり得る。羊を飢え死にさせることは、公然たる裏切りのようにあざやかではない。けれどもその結果は同様な災禍なのである。イエスはユダの裏切りによつて永遠の昇栄を失わなかつたことを考えるのは興味あることだ。けれどもこの一〇%のワード部の少年の或者は善意の指導者たちの單なる怠慢によつてその昇栄を失つてゐるのである、或指導者たちはそれを自覚することなく彼らの信頼を

裏切り或はその責任を拒否しあるいはまた彼らの権威を疑い、または切角の機会を眠つてゐるのである。その手段は相違してゐるかも知れないがその結果はどうであらうか？

ジョン・テイラー大管長は言つた。

もしも貴方が貴方の召しに忠実でないなら貴方がその義務を実行したら救われたであろうことに對する責任を神が貴方に問うであらう。



らう。

この根拠に於て我々が、その召しを受入れようとするなら我々はその失敗を防止する効果的な手段を以て武装した方がよい、

前に六十四才の老人が言つた。もしも私が四十年前に今知つてゐることを知つていたら、異つた生き方をしたであらう。私はもう一度人生を歩んで見たい。と

けれどもユダでさえも、もしも裏切る前に

自殺寸前に知つたことを知つていたら異つた生き方をしたであらう。予見することは、その血族関係にある、後から氣がつくことより、成功に於て遙かに価値があるのである。

主の生涯に於ける靈感される特長の一つは彼が悪と見なされる一つの罪をも犯さなかつたことである。或人々はいろいろの過ちを犯す。審判の庭に立つて、私はもう一度、人生を送つて見たい。と言つてもどうもならない。泣いてもわめいてもはきりしても何の役にも立たないのである。我々は再びその生涯を繰返すことは出来ないのである。人生に予行はないのである。我々は出生または死亡或は成功をためして見ることは出来ないのである。けれども我々は單に自分の心の内にある惡の思いをそれが行為となつて現れる前に反省し予見することによつて、大いに自分を援けることが出来るのである。

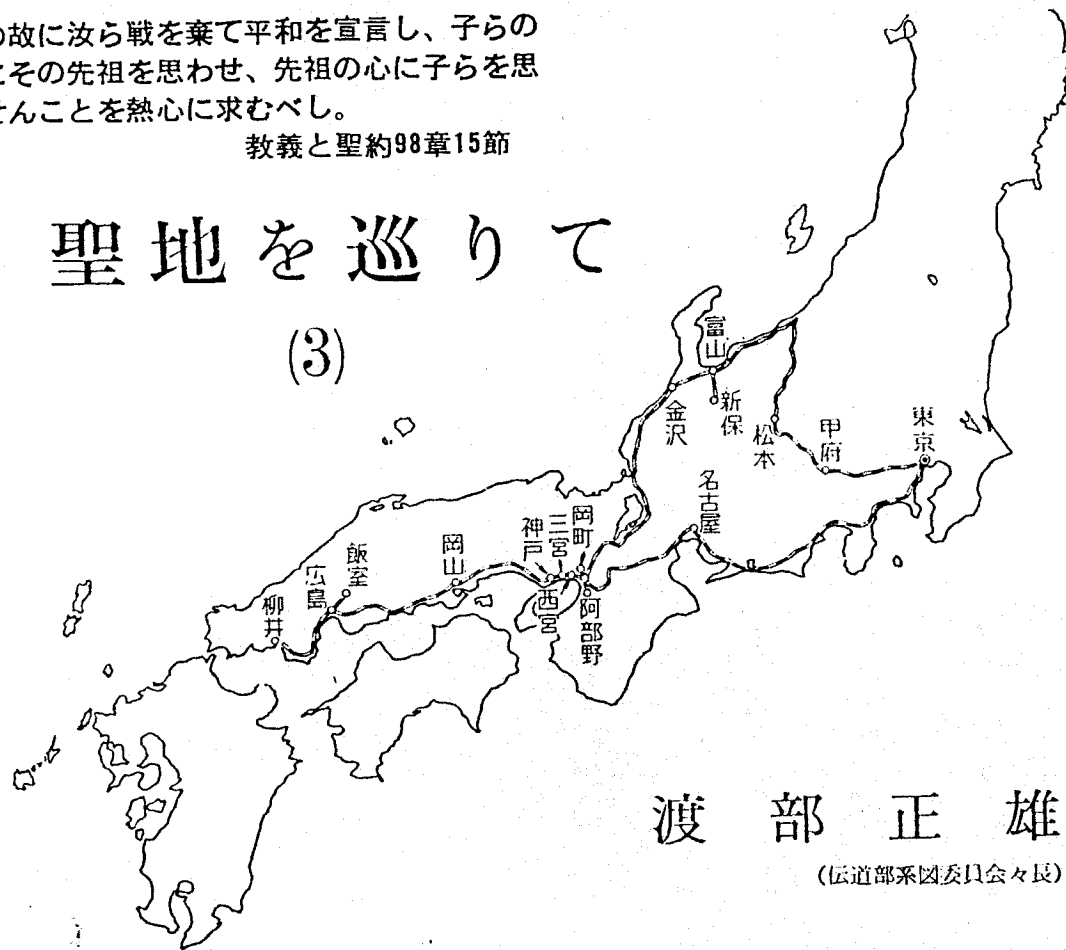
裏切りは、如何なる程度にせよ、恐るべきものであるが、無思慮、無力および怠惰その他永遠の祝福を失うすべての事は、これと同様なのである。それであるから我々は屢々弟子たちが尋ねた。主よ我々なるかの言葉を以て反省し、過ちを犯さないように氣をつけねばならないのでありそれが我が身を救う援けとなるのである。

この故に汝ら戦を棄て平和を宣言し、子らの心にその先祖を思わせ、先祖の心に子らを思わせんことを熱心に求むべし。

教義と聖約98章15節

聖地を巡りて

(3)



渡部正雄

(伝道部系図委員会々長)

○岡町支部

かねがね全伝道部を通じて、最大の支部であると聞き、又系図の方は早くから阪本兄弟姉妹御一家の活躍により、よく行われている支部なので、一度訪問し度いと思いながらもその機会を得ずに居たが、六月八日、高鳴る胸を抑えてその門を叩いた。長老たちはトラックテイニングと見えて大きな門構えは、しーんと鎮まりかえっている。三時間近く待っていると長老たちが秋元彬江姉妹とそのお友達の求道者を伴って威勢よく戻って来た。ホルブルック長老が「長いこと待たせてすまなかった」と恐縮してあやまられるので私は「禅堂の雲水が最初に禅を求めて寺に來た時、二日位、門前に立たされ始めて入門を許されるのに位ればこんな短時間でこの素晴らしい教会堂に入れてもらえる私はほんとに仕合わせです」と感謝した。聞きしに違わず建物も庭も実に立派だ。特に礼拝堂の広いこと恐らく日本一であろう。百以上の椅子が悠々と並べてある。又この見事なホールが殆ど宣教師と信者の手によって造られたと言うから実に驚嘆した。さすがにモルモン教徒だ。この開拓精神こそ我が教会の誇りだ。この夕、七時から系図の集会が開かれ上野山第一副支部長御夫妻並に阪本幾代姉妹、秋元富佐姉妹方々が御熱心に御参加下され楽しい一時を持ち得たことを感謝した。

翌九日、金沢に向けて出発の予定であったが、支部長さんのホルブルック長老が今夜は支部大会のMIAですし、実は今日一人の求道者を訪問するのですが、丁度その家庭集会のレッスンが神殿の処だから、是非貴方にも行ってもらい度いと頼まれるのでお言葉に甘えて、もう一日お邪魔することにした。午前十時頃長老たちに伴われて岡町駅から二つ目の駅を下りて求道者安中さんの宅を訪れた。



岡町支部 M I A



岡町支部庭園

お母さんとお二人の静かな御生活、お母さんも交えて家庭集会が始められた。やがて長老が私に系図の話を、と頼まれたので私が口を開くや、安中さんは暫し大きく眼を見張って居られたが「一寸お待ち下さい」と言って別室に行かれ一抱えの書類を持って来られ、「これはみな私の先祖の系図です。私は不思議に先祖を探索することが好きで、よく人から若いのに墓場などうろついて気が変なのではないかなどと騒がれたのですが、今此の教会にこのような尊いお仕事と儀式があることを聞いて、ほんとに驚きました。長老たちが私の家の門を叩かれ、又私が今迄、他の教会の宣教師が見えてもお断りしていたのに長老たちに耳を傾けるようになったのも天のお父様のお導きでしょう」と言って喜ばれた。私は、貴方はお気づきでないでしょうが、それはすべて一八三六年に我がカートランド神殿を訪れた、エライジャの働らきによるものであると御説明申上げ、どうぞ早く信者になられて御先祖の為、又教会の為に尊いお仕事をなさって下さいとおすすしめし、安中さんも大変喜ばれてその夕、早速教会を訪ねて下さったので、私は系図委員の皆様を紹介し、よろしく願った次第であった。

その夜は M I A 支部大会で、百人以上の若人たちが集い、はちきれそうな、もろもろの活動に時の経つのも覚えなかった。新年度から役員もぐつと若返ったとか、新任の、Y W M I A 会長、秋元彬江姉妹の司会で役員一同の紹介賞状の授与、引続き余興に入り、最後のダンスは、さすが伝道部一の大ホールも狭く、有志だけ選抜して踊ってもらう始末であった。

○金沢支部

十一日早朝、金沢市に着いて始発の電車に乗った。車掌に下車停留場を尋ねていると「あつモルモン教会ですか。私が案内しましょう」と一老紳士が親切に案内してくれた。街頭伝道を聞いてから宣教師と親しんでいるのだと言われたが、始めての土地に来てまだ人通りも少いこの早朝に、早速このような宣教師の働らきの恩恵に浴するとは誠に有難くオドロイタ。

起きはなを襲われてオドロイタ（オールドロイド）長老と、モース長老と共に楽しいモルモン絆勉強の一時を終えてから、野田姉妹の心をこめての朝食にすっかり旅の疲れもいえた。この支部の長老たちは、信仰第一家野田

姉妹の家族の一員、よき息子さんたちとしてほんとに幸福な生活をしている。時間がなくて、よく外食している他支部の宣教師から見ると金沢支部は、長老たちにとって王国の中の王国であるかも知れない。この日、一日中長老たちのお伴をして街を歩いたが、そのトラックテイキングの熱心には全く頭が下った。

又市内、何処を歩いても至る処で知っている人々に逢い、笑顔を以て挨拶されるのにはほんとにオドロイタ長老だ。又モース長老の日本語の上達したのには全くオドロイタ。このような熱心なトラックテイキングが如何にその才能をのばすか、聖霊の賜の偉大さを如実に見せられて嬉しかった。

翌十二日は安息日で長老と共にすがすがしい朝道を、名に負う兼六公園を通り抜けて、約十分位で日躍学校会場、労働会館に向った。近代建築の立派なホールである。神権会は奥の日本間で山中兄弟によりレッスンを受けた。遠く一時間余りかゝる小松市から馳せ参じている熱心な兄弟たちも居た。

日躍学校は新婚はやはやで、新進気鋭の川田会長によって進められ、レッスンも同兄弟の熱意溢る、教授に興味深かった。

聖餐式に引続いて系図会が催されたが熱心

に多数参加下さり、特に早くから系図に深い関心を持たれていた、西出姉妹が遠く二時間近くもかゝる大聖寺から可愛いお子さんたちを伴って参加されたのには深く感謝した。

熱心な会員たちの希望により、この夜宣教師の部屋で座談会が開かれることになり、私は心から深く感謝した。マース前伝道部長もよく言われたが、私共会員にとって愛する兄弟姉妹と語り合っている時程楽しい時はない。それはその時、主と共に居ますからであろう。

座談会の始まる前に、この機会に新発足の系図委員会、会長前川兄弟第一副会長堀姉妹等の按手任命を行った。堀姉妹はこの支部で早くから系図の方を熱心に担当して下さっているが今度パートタイム宣教師にもなられるそうで、御同慶の念に堪えない。

座談会も宣教師の部屋は満員の盛況で、若い人向きの教会での結婚式などが話題となり和氣満々たる笑声の内に何時しか時も経ってしまった。この日は全く私にとって終生忘れられない素晴らしい安息の一日であった。

翌十三日はBYU在学の二世で、まだ母国を知らない恒田姉妹の故郷富山市外の鄉村新保に同姉妹の系図調査の為に早く金沢を出発した。

思いもかけぬ見知らぬ人々の援けにより恒田姉妹の御親戚を訪ねることが出来、又その御親戚の方々に「先祖を調べて下さるなんて有難いことだ」と感謝されつゝ共に役場に行つて何枚かのファミリー・グループ・シートを完成出来たことは、誠に生ける主の恵みによるものと感謝した次第であった。

○甲府支部

十三日、新潟支部、十四日、松本支部の予定であったが先に体の具合が悪く取消したので十四日松本支部宣教師宅を訪ねたが不在でやっと土屋姉妹の宅を教えられてお訪ねし、系図とファミリー・グループ・シート完成のお手伝をして、何枚か完成して携えて来る事が出来たのは幸であった。

十四日夜遅く甲府に着いて宣教師宅を訪れた処、丁度ガンダーソン長老と堀山長老はMIAから戻った処で私が病気で来れないと思つていただけに、びっくりして大喜びで迎えて下さった。

十五日、よき女房役の堀山長老の手になるおいしい朝食を終えると、早速トラックテイキングと、今夜の系図会を知らせる為兄弟姉妹の家を一軒々々訪問して廻った、商店、公社銀行等、各方面で忙しく一日の務めに奮闘し

て居られる兄弟姉妹の甲斐々々しいお姿を眼の辺り拝見して、ほんとに頼もしく、神の王同の進展する姿も忍ばれて嬉しかった。八十過ぎの雨宮さん姉妹のお母さんが熱心に教会の話を聞いて下さり、又いろいろ宗教に就てお話し下さり嬉しかった。

夜は雨宮たん姉妹のお宅で十人余りの姉妹が集い、楽しい系図の会の一時を持つことが出来、心から感謝した次第であった。

支部長さんのガンダーソン長老は特に日本の系図に関心を持ち、古事記伝其の他日本史の書籍を多く集めて、どしどし読破している



甲府支部系図会

のには全く驚嘆敬服した。彼がその戸棚から大事そうに一つの小さな包みを取り出して、私に見せたが驚いたことにそれは黒札に金文字の跡も鮮かに「元梁孫大剛」と記された位牌であった。彼が前任地阿倍野支部を立つ時に贈られた。愛する兄弟姉妹たちの心からなるプレゼントだそう。彼はその説明として一枚のテープレコードをかけてくれた。やがて送別席上に於ける朗々たる周藤兄弟の声が響き渡った。

「宣教師は既に、その生命を主に捧げ此の世的生活に於ては死んだ者である。又ガンダ



岡町支部系図会

ーソン・ダビデ「元梁孫大剛」の改名は先祖から子孫に大きく栄え行く家系の姿、系図の本質である」と、

巡礼の旅を終えて甲府駅を出発する私に、元梁孫長老は私が話をした耶蘇伝を含む神代歴史に就て是非小論にまとめてくれと頼まれた。

限りなき主の恩寵と宣教師及び兄弟姉妹の厚い恩恵の内に無事聖地一巡の重任を果たし得たことを心から感謝し各支部で働かれる皆様の上に益々豊かに主の祝福があらんことを祈りつゝ、車上の人となった。(終)



金沢支部系図会

私はこうして神の

真の教会に導びかれた

丸 山 周 兵

(東京中央支部)

一九三二年五月三日、長野県南端の或る寒村に生れた私は、今考えるとこの地上に生を受ける前に、既に彼はこの世の末に神の真の教えを人々に伝える者として神より選ばれていたのであった。

周開を山で囲まれた村で生活していた子供の頃の彼は非常な臍白小僧で、ムツソリーニ等と渾名される程であった。

彼の父は大変厳格な人であり、子供を愛したが決して盲目的な育て方をしなかった。又母は優しく正義感の強い人で、田舎にはめずらしく、キリストの教えに耳を傾け、生活を少しでもそれに近づけようと努力を惜まなかった。

更に又彼の祖父は村で最初のキリスト教(プロテスタント)改宗者であり、忠実なクリスチャンであった。

以上の様に大変恵ま

れた家庭で育った彼は
高等学校一年の時、優
しい母の導びきで村の
プロテスタントの教会
に行き始めた。以来彼
は病みついた様に聖書
を読みふけり、神の教

えを研究し、真理を求めた。勉強するに従って自身の不完全さを認めた彼は四キロ近くの田舎道をものともせず、夜の集会にも必ず出席する程になった。

彼が高等学校三年の十二月末、卒業後両親と共に百姓として働く事になっていた彼の計画は、牧師の勧めで東京のミツシヨンスクール進学と変った。

彼は進学の計画に夢中であつたが、両親の反対は強かった。臍白小僧であつた彼も、素直な農村青年として成長していたが、この時ばかりは自分の新らしい計画を少しも変えようとしなかった。今思うとあの時の彼は強く何かに導かれていたに違いない。

二年後には帰省し田舎の親と共に暮す事を約して、ようやく上京した彼は毎日々々を学課の勉強、福音の研究、子供日曜学校の先生

として休みなく生活した。

二年後彼は田舎へ帰る意志は全く無かつた。幸な事に田舎にも彼が働く良い職が無かつたので、彼は東京で就職し、夜は大学で学んだ。四年を終え卒業後彼の年老いた父は、愛する息子と生活する事を楽しみに彼の帰省をうながした。しかしこの時も彼にふさわしい仕事は無く両親の落胆は大きかつた。

この頃から彼は内村鑑三の本を片端から読み、その考えに感銘を受けた。彼は新教と旧教の教会をいくつか訪れたが心を満す所を見出す事は出来なかつた。その結果として彼は教会に行かなくても、バプテスマを受けなくても、その心に信仰と行いに善きものがあればそれでも良いでわないかと考える様になり彼の諸教会訪問は終つた。しかし、こんな彼の周開には誘惑がさまざまな形で現れ始めた。意志強固な彼であつたが、彼は不安に乱れて来た。そこで神の導びきをひたすらに祈つた。

一九五八年二月彼は全く新しい教会を知り、然も二人の親切で謙遜な外国人の宣教師から神の教えを学ぶ事になった。彼の心の中は、かつて味わつた事の無い言い知れぬ光りに満され、喜びで溢れた。そして末日聖徒

イエス・キリスト教会のこの素晴らしい教えに心からの驚きをどうする事も出来なかった。田舎の優しい謙遜な母の導びきが無くして、如何に現在の喜びを味わい得たぐらうかと考えた彼は早速家庭集会で学んだ事と、一ヶ月間の出来事とを一冊の原稿にまとめ母に送った。母は大変喜びが親戚の誰にもそれを見せた。或る知人でクリスチャンに見せた所、目に涙を浮べて読んだと母の便りは告げていた。現在彼は黙々として与えられた聖なる数々の仕事に働いているが、多くの試練の後に導びかれたこの教会こそキリスト・イエスが組織された真の教会である事に対し、一点の疑も持っていない。そして与えられた妻と共に、やがて生れて来る子供の事等を思いつ、この末日聖徒イエス・キリスト教会の会員として常に進歩向上の道を歩まんと努力しているのである。

(会社員 28才)



自由という言葉を私たちはよく使います。そしてまた、この話も何人かの人たちによってたびたび話されています。私があえてここで自由という題を取り上げましたのには理由があります。それはあまりにも自由という意味を誤解している人たちが多いからです。私たちには自由という本当の大切な、すばらしい神様からの授かりものがあります。思考の自由、発言する自由、善悪を選ぶ自由、etc、それこそ数かぎりない自由があります。しかし自由というものを何をしてもしよいというように解釈すべきでしょうか。私たちはあまり自由をふりまきすぎて、他人に迷惑をかけてはいないでしょうか。団体生活、社会生活をみだしてないでしょうか。神様はその為に、自由を私たちに与えたのでしょうか。このことについてもう一度考えてみたいと思います。私達には大切な団体生活があります。社会を離れて生活することは出来ません。その社会を、団体をより美しくする為には自由をはきちがえてはならないのです。教会に於いても同じこ

自由と私たち

南 城 綺 子

(東京中央支部)

とがいます。真の神の福音を広めるためにも、また私たち個々の進歩のためにも、私たちは会員はかく団結しなければならいのです。他の人たちのことも常に考えなければならいのです。これでは自由がないではないかとお考えになるかも知れませんが、しかしこゝで自由をはきちがえたならば、完全に自由のない社会となるでしょう。私たちは自由を常に大切にし、そして最も適切な時にのみ、口にすべきでしょう。自分たちには自由があるという言葉にかかれて、誤ちがいを犯したことによく気付きます。自由意志の故に、人間は罪に責任を持つといわれます。また人がその行動に従って報いを受けるということは善悪を選ぶ個人の自由の先行条件であるともいわれます。私たちはこの大切な自由を自分の責任によって、正しく行使しなければならないと思っています。

「ヒラマン書十四章三〇——三一節」人間は自ら善悪を選ぶ自由意志が与えられているから、自分の行為に全責任を負わねばならない。

(公務員 24才)

仙台支部活動

シート一挙に6枚

本部へ提出委員の関心高まる

系図委員会では会員から寄せられた「家族の記録」の整理を急いでいたが、七月中に一挙に、六枚を本部に提出した。

委員会はさる四月改組されその間、地方部大会、同特別大会、委員の事故など重なったため、若干の空白はあったが、五月初会合以来、着々と体制をととのえてきていた。

こんど提出したシートは前から留保されていたのと、七月に寄せられた分をまとめたもの。提出者名は次のとおりだが、委員会の運営もまったく軌道にのったので、こんご会員の系図への関心は一段と高まるものとみられる。

提出者 遠藤孝子 紙谷富保(2枚) 砂子嘉子 岩松和子

高橋ちよの

PRの具体化を協議

七月定例委員会

七月の系図委員会は三日、委員五人が出席して開き、先月の反省と今月の計画を協議した。とくにPR重点の方針から、系図委員会の動きを中心としたニュースを毎月発行することをきめ会長が編集・発行責任を受けもつことにした。ついで今月の仕事の割

当を行なった。当日きまったPRのおもなものの次のとおり。

▽系図ニュースの発行 毎月発行し会員に無料配付する。内容は委員会を中心に活動状況、教義、宣伝など

▽提案箱の設置 委員会への要望、批判、質問など投書してもらう。

▽掲示板 Ⅱポスターなどをまとめてはるために。

委員会日記

月 日

まず委員の近況を紹介すると

○…せっかくうまくいきそうだと思ったら、また会長がかわったと委員たちは大ファンガイ。さつそく新会長の遠藤兄弟に、逆もどりましたら承知しません、とねじこんだ。会長なにを思うか、右腕をさすり、やたら力コブを出して、ニヤリ。

○…サトリをひらくとが然馬力のかかる塩姉妹。猛暑たけなわの午後、タイプの手さばきもあざやかに、シートを六枚も仕上げてしまった。このチョット猛進ぶりには並みいるモサ委員も追いつけず。フウフウ。

○…動きまわっていてもデンとしてみえるのは岩松姉妹。口かず、少なく働きで実証というわけ。いままでの委員会のシート作成のほとんどが、彼女のおかげというから大したもの。

○…委員会だけでは働きたりないと山岸兄弟。こんどMIAをせ

おいたった。委員としての働きぶりからみて、一〇一％以上の力を新責任にせると、委員会もかげながら声援。

○：おかあさん思いの田川姉妹。夏休みももどかしげに家へとんで帰った。おみやげ話を、目を大きくしておかあさんに話しているさまがありありとみえて、委員一同はニコリ。

○：卒業論文に、バゾクの系図？を調べるとかいつてはりきつた中川兄弟。リュックサックをせおって、千古オノをしらぬ岩手の深山に向かったまではいいが、呼べどこたえず、もう一カ月以上音さたがない。気はやさしいが力もちの彼のこと。まさかバゾクにつかまったのでもあるまい。

系図を身につける

働きの根本精神

系図は信者にとって大切な仕事だ、と多くの人からきかされてきた。聖句にこうあるとか、やれ予言はどうのともいわれてきたが、大切なことばかり強調されすぎたあまり、なぜ大切なのかという大眼目が薄れてしまっていたようである。その結果、系図は聖句に現わされたものだけにすぎないという観念を、多くの人がもっているのはたしかである。これでは委員の働きも上すべりであり、叫べば叫ぶほど耳をふさがれるのは、あたりまえである。系図というと、なんとなく威圧感を与えてきたのは、ただ単に聖句と結びつけてしか考えられなかったためでもある。このままですら、系図は委員会だけのものであって、会員と遊離したのものになってしまおうと私は会長になったとき感じた。

系図はめんどうで、しんぼう強くないとできないかもしれないが、しかしなくていいというものではないし、あとでやろうと、のばしていいものでもない。また系図の仕事よりもその先のわずらわしさが先走ってそのため手をつけられないでいたり、義務・責任観念からようようやるのでは、系図の仕事の意義がない。

系図を身につける

私は委員会の運営、会員の仕事をすすめる根本精神を、こうきめた。なぜ系図を調べるのか、その仕事の意義を知って働く人は系図を身につけている。それがたのしくなっている人は、すっかり身につけている人だ。委員会ではこの精神を会員に浸透するため、まずPRを重点的に行なうことにした。すでにホールの後ろ壁には、系図の仕事とはどんなものか、なぜ大切か、系図の作り方などをはり、会員がいつでもよめるようにしている。ホスターもはっているが、とにかく会員が、よし系図をやろうという気持ちをもっていただけなら、本当にうれしい。委員はいつでも相談に応ずるし、どしどしわからないところはきいてほしい。系図は他人のことではなく自分のことなのか、もっとたのしくなってもいいと思う。

私は委員と協力して、いままで基礎をつくられた人たちの実績を無にすることなく、いつも新しい気持ちでこの重責を果たしたいと思っている。

遠藤 肇

母と妻と娘

小室

(東京中央支部)

啓

私の母は父の出征した後、幼い三人の子供を連れて新京から引き揚げ、女手一つで私たちを健康に育て学校を卒業させてくれました。母は米空軍のモルモン家庭の人々に導かれ、教会に入りました。その頃私は遊び廻っていたので、母が教会に行っていたことは全く知りませんでした。しかし私は招かれて行ったそのモルモン家庭の清らかな雰囲気は今でも忘れられません。その後、勧められて教会の大会や親睦会やMIA等に行き、いつしかMIAに出席するのが楽しみになり欠かさず出席しております。こうして楽しく過している中に、多くの人々がバプテスマを受けるを見て、教会のことをもっと深く広く知りたくなり、家庭集会を受けてみたいと思い立ちました。そこで当時、東京西支部長のブロードヘッド長老にお願いして毎週教えを受けま

した。その後、ウェルチ長老に教えを受けた時「今度の日曜日に出席しますか」と聞かれましたが、私はその時化学工場の研究室に勤めており、又とても山が好きでしたので、「山には日曜にしか行かないので出席は出来ないと答えると、彼は真剣な顔で「好きなようにしなさい。しかし雨が降るように祈ってください」と申されました。不思議にもその日曜日は雨が降り、彼の言葉に従わねばなりません。福音を勉強するにつれて悔い改めることの重大さに気付き、そして無事にバプテスマを受けられたことを今、母や長老たちに深く感謝しております。その後、西支部の会員として微力ながら一生懸命に働いていました。先日、大きな愛と信仰をもって若くしてキリストの元に帰られた野口兄弟と奥様の助力によって金井幹子姉妹と結婚し、中央支部に移りました。結婚する時、伝道部長からある意味で幸福になります、経済的には大変ですといわれました。ほんとうに大変でしたが、その当時、大会で収入の10%でなく、

1%を教会に捧げるようにいわれました。その誠めを守ることににより多くの恵みがあり、先月は結婚当時の収入と同額を捧げられました。楽しい生活のお礼として収めることによって霊的にも物質的にも進歩があることを証詞致します。

長女に恵まれ、妻は扶助協会役員として働いております。毎日、主の見守りの中に楽しい家庭生活を送っております。第一副支部長だった田中兄弟の後任として日本で一番大きな支部の役に召され、また非専任宣教師として真の福音を伝える僕として働く機会を与えられ、大きな恵みを受けることを感謝しております。そして日本人の信者が多く、強くなり日本の地に美しい神殿の建つことを待ち望んでいます。(会社員 27)

▽ お 願 い

「聖徒の道」は貴方のものです！ 当編集部では只今、原稿の募集を行っております。支部ニュース、体験談（信仰と証詞）文芸作品（詩、和歌、俳句）などです。どしどし御投稿下さい。なお、聖徒の道に対して御批判、御希望、その他お気付きのこととがありましたら編集部の方へどうぞお知らせ下さい。皆様一人々の力を結晶してより充実した機関紙にする為、皆様の御協力をお願い致します。

末日聖徒イエス・キリスト教会歴史粹

(九)

ジョセフ・フィールディング・スミス著

第二部 時満ちたる神権時代の開始

第七章 示 現 (千八百二十一年)

三、ヤコブの約束を試す。「この言葉の争いと信念の動揺の真最中に、私はしばしば自分の胸に問うた『私は何を為すべきか。すべてこれらのともがらの中、何人が正しいか。或いは彼らは共にことごとく間違っているか。もし彼らの中で誰かが正しいとするならば、それは何れであつて、どうして、それがわかるのか』と。これらの宗教家連中の論争から引き起された極度にむづかしい事情の中で、私が心を苦しめて居るある日のこと、私は新約聖書ヤコブ書第一章第五節の『汝らの中もし智慧の欠くる者あらば、惜しむことなく、また咎むることなく、すべての人に与ふる神に求むべし、さらば与えられん』という所を読んでい

た。どの聖句にもまさつて、この時ほどこの言葉が私の心に真に力強く迫つて来たことはない。それは私の心の底と言ふ底を大きな力で貫き通すような気がした。私はこの言葉を再三再四思いめぐらして、もし誰か神よりの智慧を必要とするならば、正にそれは私であることを知った。なぜならばこの際私はどうしてよいか知らなかったし、当時の私の智慧よりもっと深い智慧が得られなかったなら私は為すべき方法を知らなかったからである。それと言ふのも、種々な教派の宗教家師たちは、聖書の同じ章句をめぐり非常に異つて解釈し、その結果人が聖書に訴えて疑問を決しようとする信頼をことごとくうちこわしていたからである。とうとう私はこのまま暗黒と混乱の中に止まらねばならぬのか、それともヤコブの指図をする通り神に願わねばならぬのか、どちらかにせねばならぬという結論に達した。私はついに『神に願う』と決心をして、もし神が智

恵の欠けた者に智恵を与え、しかも惜しむことなく咎めることもないならば、ひとつ神に願ってみようと決めた。そこで神に願うというこの決心に従い、これを実行しようとして私は森の中へ人を避けて入りこんだ。それは千八百二十年の早春、一点の雲もない美しい朝であった。このような企をしようとしたのは、私の生涯で始めてであった。というのは私があれほど苦しんでいる真最中でも、口に出して神に祈ろうとしたことはまだこれまでになかったからである。

四、示現。 「私は前以て行こうと計画をして置いた場所へ人目を避けて入りこんでから、あたりを見廻して人気がないのを見ますとひざまずいて自分の心の願いを神に祈り始めたが、私が祈り始めるや否や、直ちに私は何とも知れぬ力によって促えられ、ついに私は全く抵抗力を失った。またその力は私の舌さえしびれる程の驚くべき力を振ったので私は物言うこともできなかった。そしてあたりはだんだん暗くなり、一時はあたかも私はこのまま急に死んでしまうかのように思われた。しかし、私は自分を捉えたこの敵の力から何とぞ逃れしめたまえと、全力を振りしぼって神を呼び求めたが、私が今にも絶望に打ち沈んでわが身を破滅に任せようとしたその瞬間、それは考えただけの滅亡というようなものではなく、目に見えぬ世界から来た何ともわからぬ生き者で、全くこれまで私がどんな者に

逢っても覚えたことのない程の驚くべき強い力を具えた者の力に打ち負けて、わが身を見捨てようとしたその瞬間、この非常な驚きの瞬間である。私は自分の真上に太陽にも増して輝やく一つの光の柱を見た。そしてその光の柱は次第に下りてきて、光はついに私の上にふり注いだ。

「その光の柱が現われるや否や、私はわが身を縛った敵から救い出された事に気がついた。そしてその光が私の上に留ったとき、私は筆紙に尽し難い輝きと栄光を有ちたもう二人の御方が私の真上の空中に立ちたもうのを見た。そしてその中のお一人が私に言葉をかけて私の名を呼びたまひ、他のお一人を指して『こはわが愛子なり、彼に聞け』と仰せられた。

「私が主に伺おうとした目的は、私が何れに加入すべきかを知るためにすべての教派の中で何れが正しいかを知ることであった。それで私はわれに返って言葉が出せるようになるや否や、私の真上で光に包まれて立ちたもう御方に、すべてこれらの教派の中で何れが正しいかをして私は何れに加わるべきかを伺った。ところがそのお答えに『汝はその何れにも加わるべからず、彼らことごとく誤れるを以てなり』と言いたもうた。そして、私に話しかけたもうたその御方は『彼らの信条はことごとくわが目より見て悪むべきものなり。また彼ら信条を口にする者たちはことごとく腐敗せり。また彼らは唇もてわれに近づけど、その心

はわれに遠ざかれり。彼らは人の誠命を教えとして教え神を敬う様をすれども神の力を否む』と宣うた。この御方は再び私にどの教派にも入ってはならぬと留めたまい、また、他に多くの事を真実私に告げたもうたが、この度はそれを誌することができない。私が再びわれに返った時に気がついて見ると、私は背を下にして横わり、天を仰いで居たのであった。

「光の去った時に、私は力が無かった。しかし間もなくやや恢復して家へ帰った。そして私が壁炉によりかかって居た時、母はどうかしたのかと私に尋ねた。私はこれに答えて『心配なさるな、万事よろし。何も悪いところなし』と言った。そしてそれから母に『私は今自分で長老派の教義は真実でないことを知った』と言った。

五、各教派の反対。 「私が悪魔の王国の妨げを為す者と悩ます者になると定められていたことは、私の生涯の極めて初期に悪魔が気付いたかのように思われる。そうでなければ、どうして、暗の力が聯合して私に逆らって来たのであるか。私がまだ幼い時に私に対して反対と迫害が起ったのは何故であるか。

「この示現を見た約二三日の後、私は前に話した宗教上の騒ぎの際に非常に活動をしたメソジスト派の一教師とたまたま一しよになった。そして宗教上の問題に就いて話をしたついでに、私は私が受けた示現について物語った。と

ところが私はこの教師の振舞に非常に驚いた。彼は私が神と交通したことを素気なくあしらったのみならず、また非常に輕蔑して言った。そんなことは全く悪魔の仕わざである。今の時代に示現だの啓示だのというようなことがあるものか、すべてこのようなことは使徒の時代で終わっている。もうこれから決してそのようなことがあるものかと。

「しかし、それから間もなく私がこの話を語ったことが、宗教を口にする者たちの間に私に対する大きな反感を引き起し、そしてこれがひどい迫害の原因であったことを私は悟った。そしてこの迫害はますます甚しくなっていく。私は一介の名もない少年であった。たった満十四才を超えた年齢の少年で、しかも生活状態から言って何ら世間で取るに足らぬ程の者であつたけれども、歴々の方々は私に反対して世上人心を刺戟し、甚しい迫害を引き起すほど私のことをわざわざ気にかけられた。しかも、これはすべての教派間に共通したことであつた。すなわち全部の教派が聯合して私を迫害したのである。

地上の小さな天国

テッド・プライス家

〈副伝道部長訪問記〉

日本の大新聞でテッド・プライスの名前を活字にしなかった所はないのではないだろうか。十二年前宣教師として日本に来たときは、もとアメリカの海兵隊上りの宣教師として、奇跡的にテニアンで助かった事と、日本兵の遺品、特に兵士が胸にいだいていた家族の写真をもちかえり、その家族をさがし出す為に各新聞は大々的にこれをとりに上げたものです。彼が帰国してからまもなく、アメリカの旅行から帰った日本の著名人の口からラジオや新聞で彼の名が出て来るようになりました。ソルト・レークで神殿の庭園や街を案内されたこと、それが流調な日本語であって、親切にも彼の方からホテルに電話してくれた事等、人によって異なるが、誰れも一致している事は心からこの親切さに感激していた事でした。それが昨年あたりは親日家のもと宣教師のアメリカ移民局のテッド・プライス氏として、特に農業移民の日本青年たちのよい相談相手としてその行為がしばしば新聞の記事としてとり上げられるようになりました。



実はその頃は飛行機で日本とアメリカの間を毎月二度程とびあるいている時でした。テッド・プライス副伝道部長は戦後の第一陣の五人の宣教師として、今のアンドラス伝道部長らと共に来日しました。ハワイで六カ月、日本では二年半伝道し、最初は東京で、高木富五郎兄弟と三カ月程伝道しました。名古屋の鳴海、大阪の十三に伝道、今の阿倍野支部と福岡支部は彼が開設しました。今月の伝道部長会メッセージで本人が云っているように、宣教師を解任されてからただちにハワイ神殿でラモナ姉妹と結婚しましたが、実は軍隊と伝道期間の六カ年の長い間のばされつづけていたのです。六年という長い



間ラモナ姉妹はセントラル・ステイト伝道部で二年間宣教師として働き、また大学では看護婦の勉強をして彼の帰国をち々とまちわびていました。それは、まるで日本女性のお株をうばってしまう程の美談ですが、アメリカ女性にもこのような人がいるのですからおどろきです。一九四四年のミスター・ユタ、その体はボディ・ビルの見本のようなテッド・ブライス兄弟の夫人はまたそれにふさわしく

才たけていてみえうるわしくなさけも深い人でした。それは八咫電機のPRマンにこの美しいママさんと、可愛らしい長女のデボラちゃんが目にとまりさっそくゼネラル・テーフ・コーダーの宣伝に使われた程なんです。今二人の間には聖書からとった長男のマーク(マルコ)八才と、長女のデボラ七才と、次男のステイブン(ステパノ)の三人の子宝にめぐまれており、楽しいホームがたちづくられています。長男のマーク君はこの程パパさんの手からバプテスマを受けた立派なモルモンの兄弟です。このテッド・ブライス家は順番に計画と司会をするホーム・ナイトが毎金曜日開かれています。次男のステイブン君が計画するとどうやらあそびが多くなるし、パパですとお説教が多くなるが、ママであると教会歴史や聖句のゲームが多くなるらしい。この教会には沢山の宗教的な子供のアそびがあるが、この家のママさんもよくそれに長じておりました。

テッド・ブライス兄弟がここに小さな地上の天国をか程までに立派に作るまでは随分努力したようです。まづ日本から帰って、ユタ大学で学び、アルバイトとして教会の歴史事務局で働きました。この時反モルモンの印刷物の整理係りであって世男中の何百、何千の雑誌をファイルしたということです。この頃、証詞を非常に強めたと言は云っていま

す。反モルモンの雑誌をみればみる程この教会の真実なる事を深く知る事が出来たと彼は証詞し、また、ジョセフ・フィールディング・スミスと親しく接する事が出来たのも証詞を強める事が出来たと彼は云っております。教会に反対する人とか、ものすごく興奮した人でも彼の事務所に入ってしまったら出て来るときはみな笑顔で彼の人格にふれて帰って行くのを多くみかけたと言っています。

一九五五年に移民局の仕事にたづさわってからメキシコで働き、のち日本の移民の仕事にまわされたわけですが、教会に於ては二十六才でソルト・レークのユニバーシティ・ステーク部ウエスト第十一ワード部の第二副監督になっています。このステーク部の最年少大祭司であって、大祭司の定員会には著名な学者やもと伝道部長であった人が多くいたところでした。

九才の時彼は父親に亡くなられているが、同じ頃祝福師から「東方の島々」に召されています。伝道するであろうという祝福の言葉を受けています。それはすでに十二年前には真実となつていますが、日本のアメリカ大使館の移民局の仕事、転任になるに及んでは副伝道部長として召され、特に日本人会員の係りとなつては、さらにこの言葉は彼にとって大きな意味をもって来ているようであります。

(大塚昌治)

伝道本部だより

神権

○祭司

川口 高司 岡町

朝田 茂一 //

岡田 松雄 新潟

川田 ますを 金沢

福田 実 東京北

松浦 孝康 //

荒井 ケンゾウ 東京中

他に韓国に執事八名、教師一名の聖任がありました。

○執事

赤沢 進 新潟

大城 朝次郎 那覇

古波 啓次 //

山田 勝康 名古屋

太田 勝 //

久保 国男 東京中

○教師 高良 慎清 岡町

中本 満 //

星 政彦 新潟

前川 のぶすみ 金沢

高柳 卿行 東京北

山田 実二 //

川島 賞 東京南

バプテスマ

島村 忠司 横浜

青木 菊枝 //

青木 勝久 //

中島 恒夫 東京西

鄭^{てい} 豊雄 //

宮沢 宋実 東京南

岡 進 東京北

酒井 久枝 //

長谷川 明美 東京中

横道 由紀 札幌

上田 智津子 //

島脇 典子 //

宮村 邦夫 //

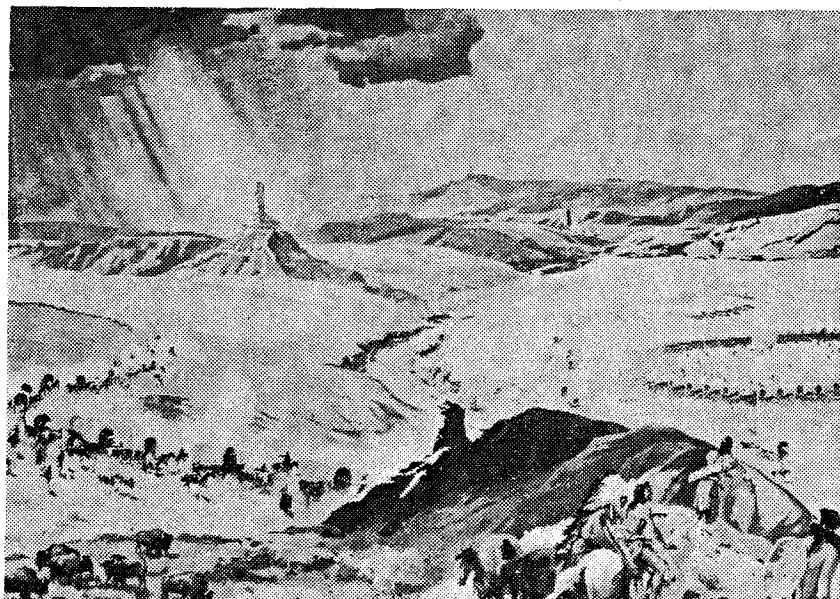
山田 勝弘 三宮
池田 潤子 小樽
南原 佳津子 岡町
宮本 美智子 //
加藤 彦人 //
榊田 俊昭 岡町
山城 千賀子 那覇
安以峯 スミ子 //
山城 留美子 //
石井 久美子 室蘭
青木 サダ 松本
浅見 佳子 阿倍野
他に韓国に二十一名のバプテスマがありました。

支部所在地

阿倍野	大阪市阿倍野区阪南町中一ノ三八
旭川	旭川市八条五丁目
福岡	福岡市薬院大通二ノ五五
群馬	高崎市並榎町二七五
広島	広島市古田町古江四〇〇ノ三
金沢	金沢市成瀬町一ノ四 野田方
甲府	甲府市富士見町一
松本	松本市沢村一六〇四
室蘭	室蘭市幸町八九
名古屋	名古屋市中昭和区北山町三ノ四一
新潟	新潟市中大畑町五五七 金井方
西ノ宮	兵庫県西ノ宮市田代町一一一
岡町	大阪府豊中市岡町北二ノ一八
岡山	岡山市国富一ノ一一九 丹下方
小樽	小樽市富岡町一ノ三五
三ノ宮	神戸市灘区篠原本町四ノ三五
札幌	札幌市北二条西二四丁目
仙台	仙台市光禅寺通り二八
東京中央	東京都渋谷区八幡通一ノ三四
東京北	東京都豊島区椎名町四ノ二〇六八
東京南	東京都大田区南千束町二四九
東京西	東京都武蔵野市吉祥寺三六八
山形	山形市諏訪町三九七
柳井	山口県柳井市今市三九一
横浜	横浜市港北区篠原町二九
普天間	沖縄宜野湾村野嵩区三二八
那覇	沖縄那覇市松尾区一三九

編集後記

七月は「開拓者の月」であります。由来、モルモンの精神はしばしば開拓者精神によって代表されて居ります。かつてブリガム・ヤング大管長の唱えた「質実剛健」の精神は、これからわが国で陰に陽に奨励されようとしている「浪費道徳」に対する良い警鐘ではないでしょうか。(佐藤)



7月号表紙 モルモン開拓者の図

この末日に回復された神の王国の土台となっているのがこのモルモンの開拓精神で、これは世界の民の称讃のまとなっている。モルモンは又神殿を建てる民だとも呼ばれているが此の日本の地にも早く神殿を建てていたゞく為に会員の一人々々がこのモルモンの開拓精神を以て系図探求に精進しようではありませんか。(渡部)

渡部兄弟の「聖地を巡りて」は今月号より九月号にわたり三回にわけて掲載致します。末日聖徒たちのいるところ、それはすなわち聖地とみたてた彼の旅行記は広島に致り最高頂にたつします。御期待下さい。(大塚)

月刊「聖徒の道」第四巻第七号

一九六〇年七月一日発行

実価 一ヶ年 三百円

一部 三十円

編集兼
発行人

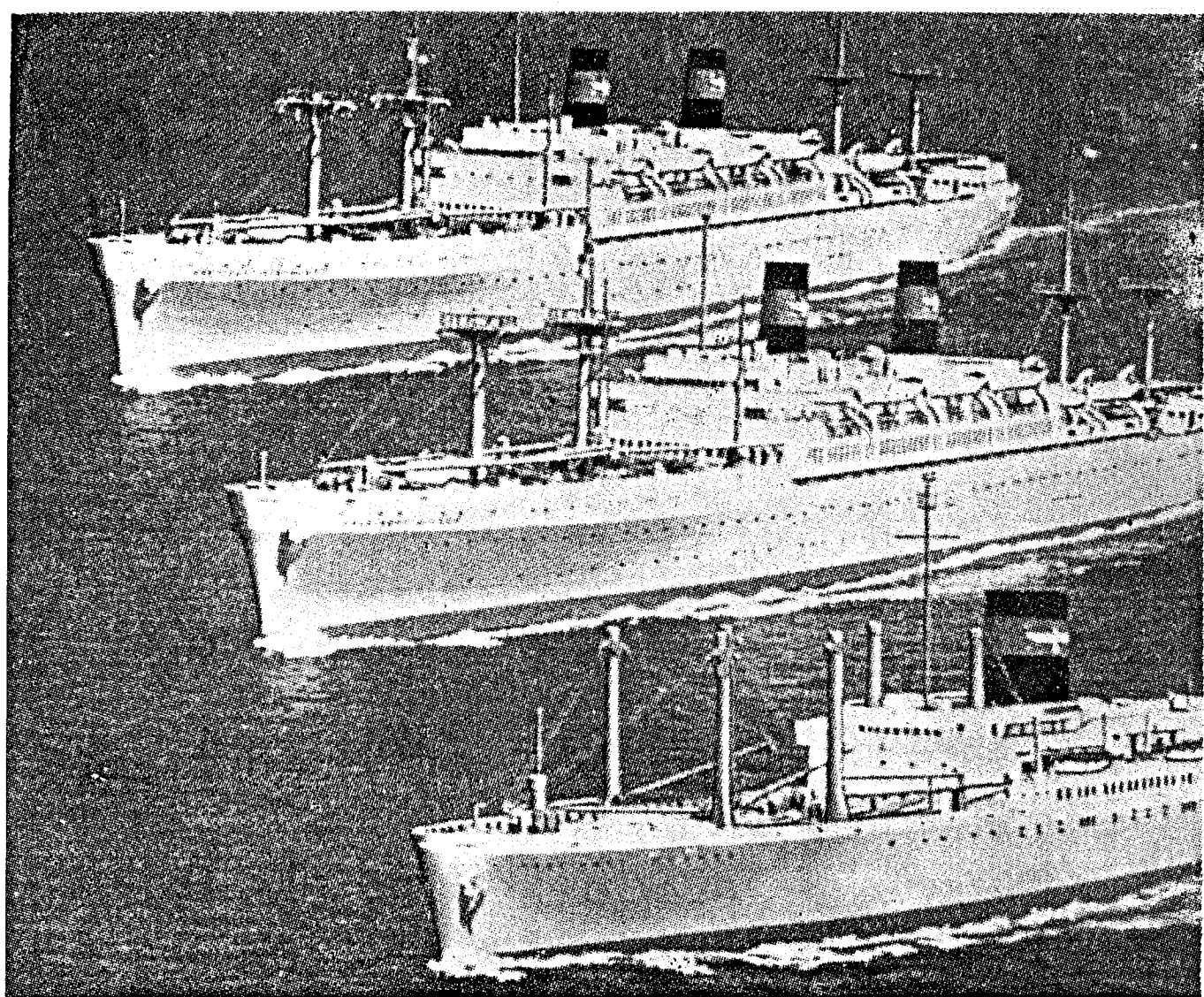
ポール・C・アンドラス

発行所

東京都港区麻布広尾町十四

末日聖徒イエス・キリスト教会

(北部) 極東伝道部



アメリカ向定期に出帆する 豪華船プレジデント号

明日といわず、今すぐ桑港向け出帆の一等とエコノミー・クラスの完備したプレジデント・ウィルソン号又は姉妹船クリブランド号又はプレジデント・フーパー号(一等のみ)に御乗船の予約を御申込み下さい。

豪華なプレジデント・スタイルで素晴らしい航海をお約束申し上げます。

御希望により、海空連絡スケジュールを組むこともできます。早速弊社支店又は代理店にお問合せ下さい。



東京 (201) 6831-8 横浜 (8) 7541-5 神戸 (3) 5381-4 大阪 (23) 0260